

# 名古屋の古道・街道

池田 誠一

## 【18】四観音道…安田から茶屋が坂へ

### 1 尾張四観音

名古屋城下の周囲を取り囲むように、奈良時代からあるという4つの古い寺があります。西北の甚目寺。東北の龍泉寺。東南の笠寺、西南の荒子観音で、いずれも観音像を本尊としており、尾張四観音と呼ばれています。(図1) ちょうど名古屋城の四隅に立地しており築城の折に家康が城を鎮護するものとして定めたといえます。

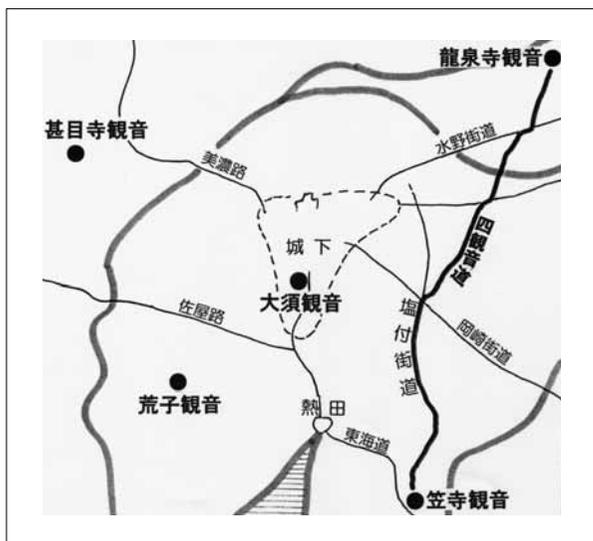


図1 名古屋と尾張四観音

そしてそれら4つの中心として城下の中央に大須観音を置きました。これらの寺々では現在でも毎年恵方を定め、2月の節分には盛大な豆まきが行われて多くの参詣者を集めています。

昔、まだ交通機関のなかった頃、この四観音を巡礼する人たちによって巡礼道とでもいうものが出来ました。それらの道の中には主な街道から離れて独自の巡礼道となったものがありました。なかでも名古屋の東部、笠寺観音と龍泉寺観音を結ぶ道の一部、覚王山の辺りは現在も「四観音道」の地名を残し、その面影を伝えています。

### 2 身近な観音巡礼の道 …四観音道

#### (1) 観音信仰と巡礼

観音菩薩は姿を変えて衆生を救ってくれる仏として、古来最も人気がある仏様のひとつです。いろいろ姿を変えることから、それらの仏像を巡回する習慣が出来ました。6(7)観音とか33観音がよくあり、有名な西国三十三箇所の札所の巡礼も33に姿を変えて現れるという観音信仰に基づく旅といえます。

四観音というのは特に決まりがあるわけではありませんが、たまたま名古屋の鬼門を含む四隅に観音を奉った古い寺があったため、城の鎮護として政治的に唱えられたのでしょう。

4つの寺は、

- ・ 甚目寺観音：推古5年(597年)、聖観音
- ・ 荒子観音：天平元年(729年)、聖観音
- ・ 笠寺観音：天平5年(733年)、十一面観音
- ・ 龍泉寺観音：延暦14年(795年)、馬頭観音

とそれぞれに古い寺暦と由緒ある観音を持ち、名古屋城のできる前から歴史に名を残している寺です。庶民にとっても、遠く旅することなく日常の範囲で行ける所として人気があったのではないのでしょうか。

## (2) 笠寺観音から龍泉寺観音へ

笠寺観音と龍泉寺観音を結ぶ道は笠寺からは龍泉寺道(逆向きは笠寺道)と呼ばれます。笠寺観音を出て北に進み塩付街道に合流します。北に向って笠寺台地、御器所台地を進み、安田付近で塩付街道と別れて右に曲がります。そして東北に丸山を抜け覚王山を越えて山口街道に合



図2 塩付街道から別れた龍泉寺道

流し、茶屋が坂を下ります。下ったところで北に曲がり、矢田川を渡って小幡から龍泉寺に向かいます。(図2)

## 3 安田から茶屋が坂へ

さて塩付街道から分かれる所から北に四観音道を歩いてみましょう。少し離れていますが地下鉄の吹上駅が最寄りになります。駅の北口を出て広い通を東に向かいます。3つ目の信号を左に少し行くと光明寺があります。この地を開墾した鈴木安太夫の碑(安田塚)があり、これが地名になりました。

四観音道はその碑の2本東の道で、北に緩やかに上っています。覚王山に続く丘陵を進むとバス通りの手前右手に松林寺があります。江戸時代以前からの古い寺で、本堂は江戸時代の建物といえます。通を渡り、昔の丸山村の集落を過ぎると左に丸山神明社があります。うっそうとした緑の中に、ここには江戸時代の常夜灯が残っています。

道は尾根の上をまっすぐに東北に進み、少し右に曲がって広い広小路線に出ます。ここは高針街道との交差点になりますが、もちろんその



安田から丸山へ上る



江戸時代の本堂の残る松林寺



丸山神明社

街道の跡はありません。

\*

交差点を渡って日泰寺の参道の1本西の細い道が四観音道です。参道の賑やかさに忘れられそうな道ですが、この先ではこの道を境に右が四観音道東、左が四観音道西という地名の分かれ目になっています。道は曲がって日泰寺の西門に出ます。広い境内に再建された本堂、五重の塔などが見えます。

覚王山日泰寺は釈迦の真骨をまつる日本で唯一の寺です。どうしてそれが名古屋のこの地にあるかについてはドラマがあります。

明治31年、ネパールの近くで偶然発見された釈迦の遺骨はまず仏教国タイ(当時はシャム)に贈られ、その一部が日本にも分骨されることになりました。仏教界あげて日本に持ってきまし



水道局用地内の四観音道

たが、どこに安置するかについて全国から手が上がり大問題になりました。1000万円(今の1000億円位?)の資金と10万坪の用地の提供などが課題でした。最後は京都と名古屋の争いになりましたが、官民一体となって資金、用地にめどを立てた名古屋が論破して、この丘陵地に決まりました。前回も書きましたが、その中でこの地が南北に観音巡礼の道、東西に法六句道が通る仏縁の地であることも評価されたといひます。そして明治37年、釈迦の別名の「覚王」とシャムの国名を採った覚王山日蓮寺が建てられ、真骨が奉安されたのです。

道は寺の敷地を薄く横切って水道局の用地に進みますが入れないのでその西側を回ります。少し行くと左側に鉈薬師があります。李朝の2つの石像の立つ入り口から静かな境内に入ります。ここの薬師像は中世からのもので江戸の始めに張振甫の敷地に移され、さらに明治の末にここに移されました。円空の彫った日光、月光の脇侍や12神将などがあるため鉈薬師と呼ぶよ



日泰寺近くの四観音道



覚王山日泰寺(山門から)



李朝の石像を迎えてくれる鉦葉師



茶屋が坂を下って

うです。環境のいいところですがマンションや道路が近くまで迫って来てしまいました。

水道局用地の西側を周ると前回歩いたほうろく街道に出ます。それに沿って右に曲がり坂を上ると四観音道とほうろく街道の交点の道標のところに出ます。水道局用地を出た四観音道はその交点を北に坂を下ります。

\*

道はすぐ広い幹線道路にふさがれるので迂回をします。渡った反対側は緑道の公園になっており、その先で道は住宅地の中に消えます。緑道の1本東の道に入り少し行って右手斜めに進むと赤坂公園に出ます。ここは昔は池でした。手前脇に竜神が奉られています。後で移されたものです。道は公園の中を歩いてまた住宅の中に消えます。そして2本北、左に上野天満宮のある通の社から1本東の道が四観音道になります。北にしばらく進んだ広い道で山口街道に合流します。その手前の道を左にすぐの角に弘法堂があります。中には昔四観音道に立てられていた、左龍泉寺道、右笠寺道と刻まれた道標などが収められています。



ほうろく街道交点から北に下る

広い通を迂回し、その1本北の道に移って坂を下ると茶屋が坂の交差点に出ます。四観音道はそこから北に細いあぜ道を矢田川に向かっていたといえます。

## 4 守りたい巡礼の道

今、四観音の巡礼にこの道を使う人は無くなりました。いや電車やバスが発達し誰もが車を使うようになると、単なる寺の巡回になってしまいます。巡礼にはそれに向かう道も大切な行の一部といえます。ご詠歌を唱えたり、鈴の音を響かせたり、野の仏に頭をたれて歩くようなことが信仰につながって、巡礼と呼べるのではないのでしょうか。

最近四国八十八箇所や熊野古道などに人気が出ています。それも単に寺社を回るのではなく、巡礼のように歩いて回ることが見直されているようです。

尾張四観音の巡礼道も今はどれだけ残っているのでしょうか？これまでも紹介してきましたが、笠寺と龍泉寺とを結ぶ道はそれなりに昔の巡礼の跡が迎えそうです。巡礼は現代人の心の回復や癒しに有効だといわれています。名古屋にかろうじて残された道を、これ以上壊すことなく、意識して守っていききたいものです。

梅雨空や 過ぎゆく人の 笠の内

〈主な参考文献〉

- ①小林 元「千種村物語」(1984、自費)
- ②寺沢玄宗「釈尊御遺形傳來史」(1981、覚王山日泰寺)